GREEN COMMUNITY COLLEGE
NEWS きのくに
Vol.25【1】

p1 熊野の山は甦るか　榎本長治
p2 古民家リノベーションで町中再生　博多敏希
p3 廃校舎を本屋とカフェに　柴田哲弥
p4 きのくに木育ラボの活動から見えるもの　古久保綾子
p5 熊野で始まる新西行物語　鈴木裕範
p6 きのくに活性化センター2018年度事業から

きのくに活性化センター　発行責任者／榎本長治　発行／2019年4月　〒646-0011和歌山県田辺市新庄町3353-9 BIG・U内　TEL&FAX0739-26-9670　http://www.aikis.or.jp/~aoi-kii/

熊野の山は甦るか ～木質バイオマス発電と林業再生の道すじ～

きのくに活性化センター会長　榎本長治

木質バイオマス発電所が期待を集めています。木質バイオマス発電は、木質チップを燃やして出来た高圧蒸気でタービンを回して発電する方式と木質チップを乾留して出るガスでタービンを回して発電するガス化発電方式の二つがあり、再生可能エネルギーとして注目を集める一方、国産材消費が進まない木材の消費につなげて林業の復活、山村再生に結び付ける観点から期待される存在になっています。

木材需要が高まるのは確かです。FIT(固定価格買い取り)制度によりバイオマス発電の電力買取価格は重油や石炭による発電価格の数倍に設定されており、地球温暖化対策としての振興策がとられています。これまでバイオマス発電所が無かった和歌山県でも新宮、田辺、御坊で木質バイオマス発電所が計画建設中であり、なかでも新宮市は18,000kw／hの大きな発電所が計画されています。

ここで考えてみなくてはいけないのは、和歌山県でバイオマス発電を行うにしても、バイオマス向けの木材がどれだけ集められるのかということです。バイオマス先進地の九州では、木材生産量が宮崎県で年約200万㎥、和歌山県はその10分の1の21,2万㎥にとどまっています。新宮の新発電所は宮崎、大分から運んでくる木材を主要な燃料として、田辺の発電所は紀州材の集荷の難しさから、東南アジアの椰子殻(PKS)を補いながら発電することを計画しています。九州は成長が早く節が多い木を製材する並材が主流で、宮崎県などはこの20年間地形がなだらかなこともあり、作業道を高密度に作設し、バイオマスを目的に生産しても利益が出る基盤整備を進め、高能率の製材工場により加工コストを下げるなど利益が出る仕組みを構築してきました。これに対して、紀伊半島の林業は国の政策の光があたらない場所となっていました。「役物(やくもの)」と呼ぶ節の少ない優良材が取れる木を育て、山主は良い木を売りその付加価値で食べてきました、一本の木の価値を最大限生かしてきたのが紀伊半島の林業でした。しかし、建築様式が変化し日本間が減り需要が減少、価格が下がって、かつ売れないダブルパンチに見舞われ、伐っても再生産の金が出てこない。したがって伐期を伸ばしているのが現状です。素材をABCDでランク付けすると、BCD材の利用先の合板とバイオマス等低質材の需要が増え、肝心のA材の需要が増えていない。A材の需要対策をしなければ、紀伊半島の山は甦りません。

重畳と広がる熊野の森　高原から

人口減少社会のもと住宅着工戸数が減っていく中で木材需要の矛先を公共的建物などに変えて都市の木質化を図り、生産コストを下げるための林道の整備や架線集材の近代化が急務になっています。紀伊半島の地形を考えた時、ドローン投入は可能性があります。こうした山の整備を図りつつ高品質の「無垢材」という特徴を発展させて、大量生産の九州産材や輸入攻勢を強める欧州材など外材に対抗していく必要があります。

重要なのは、優良材を生産し活かす抜本的政策です。紀伊半島の圧倒的面積を占める山村振興のカギを握るのは、林業です。優良材の提供、プレカットして工務店に紀州材の良さを生かしてもらう経営、私の会社はそのモデルケースを作るためにやって来ました。いまのまま和歌山県で木質バイオマス発電を行なっても山が期待する利益はあがってきません。生産基盤の合理化が必要です。和歌山県は95%が民有林です。森林の樹齢は60年を越してきました。森林環境譲与税や森づくり税を有効に活用して林道密度を上げ、素材生産を合理化軌道に乗せる。好循環はこれから始まるのです。林業再生プランは、単に林業・木材関係者だけの課題ではなく、和歌山県が置かれている状況、山村再生、地域活性化問題としての共通認識が欠かせないと考えています。(談)

移住青年が地域をつくる ①

古民家リノベーションで町中再生
～地域おこし協力隊員からまちづくり会社社長に～

串本町　一樹の蔭代表取締役社長　博多敏希

博多さん(左)と新谷さん

串本町の町中に石塀・石垣の家並みの集落がある。円山応挙・長澤芦雪の絵画を伝える無量寺、古びた構えの食料品店、ノスタルジックな時間。「稲村亭」は、その集落内にある。地元の資産家神田家が、明治5(1872)年に建てた邸宅で約150年の歴史を刻む。平成28(2015)年12月、文化財級のこの屋敷が親族から串本町に寄贈され、保存・活用が課題になっていた。

稲村亭の保存活用に名乗りを上げたのが、串本町の地域おこし協力隊員をしていた博多さん34歳である。平成29(2017)年11月、古民家再生など地域コミュニティ活性化で成果をあげている兵庫県篠山市の一般社団法人ノオトの関連会社NOTEと共同出資の会社一樹の蔭を設立し、稲村亭はこの春ホテル・レストランとして生まれ変わる。

博多敏希さん、新谷紘平さんとのインタビューを構成し紹介する。

鈴木　地域おこし協力隊員として遊休農地の活用や古民家活用プロジェクトなどに取り組んでいた博多さんが、会社を立ち上げて、社長に就任、一年余りが経ちました。どのような事業を―。

博多　空き家活用事業を行うまちづくり会社で、古民家の改修が一番の仕事になります。

鈴木　最初の仕事が稲村亭(とうそんてい)ですが、時間を刻んだものがもつ風格がありますね。

博多　神田家の先祖が、串本の稲村崎に漂着した一本の大木を譲られ、その木で離れの二間(10、8畳間)を増築したのが、家の名前になっています。建坪は300㎡、外観の規模、室内の造りも立派なお宅ですが、誰も住まず雨戸が閉まったままでした。

鈴木　まちづくり会社の社名が「一樹の蔭」、物語を感じます。

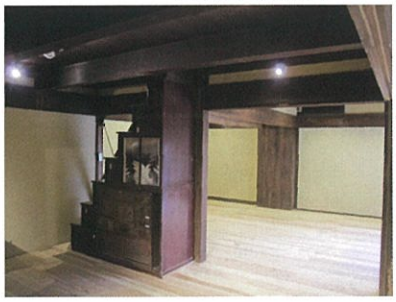
博多　神田家の継承者が家の来歴を記した冊子名で、「一本の木の蔭に憩い、雨宿りをするのも運命」という意味で、「いろいろな出合い、つながりを生む」会社にということで、社名にしました。

鈴木　会社は空き家活用事業として資金調達からリノベーション、維持管理運営まで行う。改修した家は賃貸や委託等で運営する仕組みですね。

博多　運営の仕組みは物件により変わりますが、丹波篠山の一般社団法人ノオトがモデルです。地域の人が代表してまちづくりをしています。紀陽銀行がつながりを持っていたので、そのつながりをいただきました。

鈴木　新谷さんの会社は、その稲村邸を活用して事業展開をすることになるわけですね。

◀稲村亭

▼改修中の稲村亭


新谷　株式会社サブライムです、飲食店の経営などの事業を全国400店舗で展開しています。稲村亭は宿泊と飲食の複合施設とし、宿泊は約30畳の一棟貸し切りで食事も含めた料金設計を計画しています。レストランは串本を中心にした地元の食材にこだわり、「紀州原始焼き　みなも」と名付けました。

ここから歩いて1分の所にあるもう一軒の古民家(園部邸　明治39年築)も整備して、6月中にはスタートしたい。3年間で10棟から13棟のリノベーションを行い、客室20室をめざしています。「街全体をホテルに」をコンセプトに、街中に点在する古民家の再生を通して「暮らすように泊まる」という体験を提供していきたいです。

鈴木　人の暮らしのなかにあるホテル群ですね。博多さん、串本で古民家活用が動き出すわけですが、空き家対策、古民家の活用方法が今後一段と問題になるなか注目されます。

博多　空き家の活用が進まない原因としては、「所有はしているけれど、受け継いだ」という感覚ではなくなっているので、いつか壊さなければならない物件としての認識が大きいように感じています。公平性の観点から、行政や観光協会ではなかなか手が付けられない事業でも、民間が事業を行うことで収益を上げて継続させていくことができるのではないかと思います。現在空き家の調査も進めており、次期の開発候補も見つかりそうです。

人口が減ることは止められないので、住民の数が減っていっても収益をあげていける仕組みを作る必要があると思っています。魅力あるまちづくりを考えるときに、魅力ある仕組みを作ることが大事だと思います。収益性のある観光ビジネス、魅力あるツアーや体験を提案していきたいですね。

移住青年が地域をつくる ②

廃校舎を本屋とカフェに「bookcafe kuju」

新宮市熊野川町九重　本屋カフェ店主　柴田哲弥

開店看板を出す柴田さん

カフェ▼

コーヒーの香り、ケーキの甘い匂い。隣の部屋には、平積みされた新刊本が並ぶ。北山川の右岸にあるbookcafe kujuは、廃校舎の再利用施設である。時計が止まっていた木造校舎が、新たな空間として時を刻みだした。

九重小学校は熊野川町(現 新宮市)に明治12(1893)年開校した小学校で、2005年に廃校になるまで三重、奈良、和歌山三県の子どもたちの学び舎だった。美術教育は、全国から注目された。廃校から6年、紀伊半島南部を襲った2011年の大災害は木造校舎も襲い、新宮市は廃校舎を取り壊す方針を決め、地元も了解した。この決定に待ったをかけた青年がいた、災害ボランティアとして活動した柴田哲弥さんである。「学校には地区の人の120年以上の思いが詰まっている。建物には魂がある」。市の試算では取り壊し費用は800万円、柴田さんは「その費用を残すほうに使いましょう」と提案する。校舎は、耐震構造的に問題はない。地元には反発の声があがったが、一人の女性が“援護”してくれる。水害の時に一生懸命頑張ってくれた人だ、信頼しよう」。地元は納得し、新宮市は存続に舵を切る。「家賃は免除、ただし地元町内会と協力をする」。校舎の回収費用は、地域おこし協力隊採用にともなう費用から捻出する。柴田さんは、NPO法人山の学校を設立して代表に就任する。そうして2年後の2013年11月に開店するのが、ブックカフェ九重である。柴田さんは店主になった。

旧九重小の木造校舎

柴田さんとの対話から

鈴木　窓辺でかつての校庭を見ていると、子どもたちが学んでいた日々が見えるようです。

柴田　学校の雰囲気を壊さずに職員室は厨房と一部喫茶、教室だった場所を喫茶と本屋のスペースに改修しました。

鈴木　九重に本屋はなかったのでは。

新刊が読める本屋

柴田　本屋がない町に本屋があったら面白いかもしれないと思いました。本州の最もへき地にある新刊が読める本屋さんです。京都の出版社(ガケ書房)が理解し、協力してくれました。3ヵ月に一回出版社から新刊本が届きます。返本OKで、売れた分を精算する。在庫は1,000冊、本屋のオーナーに負担がかからない仕組みです。

鈴木　地域づくり、生き方、暮らし、環境関係などの書籍が目立ちます。店主の思いが伝わってきます。窓際でケーキを食べて、コーヒーを飲んでいると、幸福な気分になりました。

柴田　コーヒーは、本格的なものを提供することが大事と考え、高額でしたが高品質のコーヒーメーカーを購入しました。スタッフは地元の女性です。サンドイッチは体育館の倉庫だった場所でパン工房むぎととしの職人が石窯で焼く小麦にこだわったパンを使っていて、人気です。パン工房の夫婦も移住者です。

鈴木　週末だけの営業なのが残念ですが、来訪者はどうですか。

柴田　年間約5千人。お客は一時間圏内が地元の人たちが半分、観光客が半分。地元のおじいちゃん、おばあちゃんもいます。SNSなどでこのユニークなカフェの情報が発信され、廃校の木造校舎が観光とは無縁の土地を気になる場所、立ち寄りたいところになっています。

鈴木　ブックカフェ九重はこれから、どうなっていきますか。

柴田　コミュニティの空間づくりまではできます、しかしそれから先が大事になって来ると考えています。カフェ開店の年の8月15日に盆踊りを復活しました、4月には小学校の校庭で九重マーケットを開き、4回目の18年マーケットは約40店舗が出店、農産物や加工品、手作り品などは人気でした。

鈴木　柴田さんが、ここを選んだのは―。

柴田　東京の大学の大学院で研究していましたが、「まちづくりを仕事にするならば現場に」と決心して熊野にやって来ました。九重は廃校舎活用とともに移り住みました。結婚し、子どもも生まれた、いま窓の下を歩いて来るのがうちの坊主です、2歳(18年当時)です、地元の人が「40年ぶりの赤ちゃん」と喜んでくれ、かわいがってもらっています。

「カフェの経営を安定させて、まず儲けてほしい。それが地域の役に立つ」、地元の区長は30代の柴田さんにエールを送っている。

地域資源をプロデュースする ①

きのくに木育ラボの活動から見えるもの

和歌山大学南紀熊野サテライト 古久保綾子

「みっちゃんの紀州ヒノキのおもちゃコーナー」に事務所を開放

子どもたちが鉛筆を小刀で削る姿がみられなくなり、どのくらい経つだろう。生活スタイルの変化や電子化が進むなか、木のまな板がプラスチックの抗菌まな板に替わり、洗濯板も見なくなった。この数十年、木質離れが加速した。

和歌山県は県土の４分の３が森林であり、かつては林業や製炭業が盛んで、豊かな山や川、海と寄り添う暮らしと産業システム、自然崇拝の信仰は今に伝わっている。しかし、その木の国わかやまも、林業従事者の減少や国産材の価格下落により森林管理が難しく、私たちが日々の暮らしの中で地域材に触れ森林の恩恵を直接感じて認識できる体験は生活の変化とともに薄れている。森林と暮らしの関係は、時代とともに変化している。私は、紀南に生きる一人として、紀南の美しい海、川のため、森林や材の活用のため、何ができるかと考えてきた。そうしたときに出合ったのが、地域材でおもちゃを作り保育園に寄付している道元正さんだった。

道元さんは、製材で培った経験や技術を次世代に伝えている85歳の高齢者、いや自身が学んだことを地域のために活かして光り輝く“光齢者”である。道元さんとの話のなかで、幼少期に親や教育者から木の良さを知る体験が増えれば木や森林、ふるさとへの価値観が変わると改めて実感した。道元さんが作りためた木の玩具で多くの子どもが遊べる機会を増やせればと話していたちょうどその頃に、田辺市の製材会社社長榎本長治さんから「木育キャラバンin田辺市」について教えていただいた。和歌山大学に共催を申請、

未就学児からできる「きのくに木育ラボのクラフト体験の様子」

３月23日、24日に図書館と連携して木育図書の企画展を開催、田辺市の大学サテライト事務室に道元さんの玩具をお借りして遊び場を設置した。そして、和歌山大学教育学部高橋多美子先生をコーディネーターに行ったトークセッションでは、木育の現状や今後への期待が語られ、木は高価だが目に見えない価値を選ぶ価値観やきのくに和歌山のアイデンティティをどう醸成し生活に浸透させ文化として根付かせられるか、重要性と必要性を提起した。議論に耳を傾けながら、私は川上から川中（製材加工）、川下をいかに繋げるかが重要で住民向けの教育プログラムなどで紡ぐ役割を感じた。当日の美術館や企業出展の木のおもちゃも素晴らしく両日で数千人が来場した。

木育キャラバン in 田辺市

県内では燃料として間伐材や端材の活用が進められている。工場で燃料になる地域材の端材が、車の玩具になり子ども部屋で走れば価値は石油の価値を超えて郷土愛を育む心の富になる。それには端材をクラフト材に換える知恵と経験が必要だ。地域の光を先人や先生方のアドバイスを受けてネットワークをつなぐため「きのくに木育ラボ」を立ち上げた。

メンバーは数名だが、植林や親子時間を楽しめるクラフト体験をしてきた市民や大学教員らで、子育て世帯から実際に子どもに与えたいものを聞きとり、ものづくりができる機会を提供して喜ばれている。今後も地域材に触れ森林を思う活動を続け、親子講座等も開催する計画で、心を動かす連携で長い活動をしていきたい。地域を彩るのは、ひととそこに住まう人々が大事に思うことの結晶であり、その輝ける光は地域独自の資源として観光や産業にも恩恵を与えるはずである。木の国わかやまに住むひととして気遣いと木遣いのできる人になり、いつか光り輝く“光齢者”として地域でかけがえのない存在になりたいと願っている。きのくにを想う住民ならではの楽しい挑戦を始めたい。

地域資源をプロデュースする ②

熊野で始まる新西行物語
～西行をプロデュースする～

和歌山大学客員教授 鈴木裕範

西行について何を知っていますか。では西行とは、何者ですか―、このように問うのには理由があります。じつは、「有名」な西行は「謎」多き人物でもある。2018年秋、和歌山県立博物館で開かれた西行展への関心の高さはもっと知りたい西行がいるからこそ、と見ることが出来ます。私も、何度も、展覧会に足を運びました。

平成最後となる2018年は、西行生誕900年という年でした。私は、きのくに活性化センターで2年前からこの記念の年に出身地の紀州だから考える、熊野でないとできない「西行プログラム」を構想してきました。プログラムは計画を変更、①「西行生誕900年記念茶会」の開催②観光マップ「西行と行く熊野」(仮題)作成の2つを柱にしました。

キックオフは、西行が桜を歌に詠み斎垣に書き付けた上富田町岡の八上王子神社跡(現在　八上神社)での記念茶会「熊野の西行を想う」の開催です、八上王子神社跡はおととし世界遺産に追加登録されました。西行とお茶？不思議ですか、確かに、西行が生きた時代(1118－1190)、今日のような茶の湯は登場していません。しかし、茶は奈良時代にはすでに日本に伝わっていて、宋から茶の木と喫茶の効能と方法を伝えて「茶祖」と呼ばれる栄西禅師(1141－1215)は西行がいた時代と重なります(栄西の入宋は1168年と1187年の2度)、西行も茶は知っていたとみていいでしょう。茶と日本人は、時代とともに変化もしてきたのです。

記念茶会は、11月18日上富田町の八上神社と文化会館で開きました。西行は上富田町で二首の歌を残しています。そのひとつが、「待ち来つる　八上の桜　咲きにけり　荒くおろすな　三栖の山風」の歌です。「紀州人」西行と熊野に目を開くのに、一服の茶は効く。蹴球は、西行終焉の地ともいわれる京都東山西行庵花輪竹峯宗匠(円位流)にお願いしました。

熊野高校茶道部と花輪家家中

八上神社での献香・献茶、茶席は上富田文化会館に移して二席、拝服席は花輪宗匠、副席は地元田辺、上富田町の裏千家茶人に担当していただき、県立熊野高校茶道部の女子高校生の力もお借りしました。花輪宗匠は、西行肖像の掛け軸をはじめ炉縁や香合に西行和歌とかかわりが深い品々を設え、西行世界を演出しました。県内各地から参加した40人余りの人たちは目福、口福を楽しみ、思い思いに西行との出会いをもたれたことと思います。

西行を飾る茶室　花輪宗匠のお点前

地元茶人による茶席

この事業では上富田町による様々な形での支援を受け、現町長と前町長が客として参加しました。献茶式では神社総代が社殿の修理・清掃・準備など全面的に取り組み、また町は町政施行記念事業の能楽上演を茶会に合わせ、金春流太鼓方「青耀会」(上田悟代表)が「西行桜」を演目に加えて神社に奉納しました。点心席の料理、茶席の主菓子は地元の料理屋と和菓子屋が調製、「地元力」を発揮しました。秋の西行物語の主目的はまちづくりなのです。こういう茶会、たぶん茶人は企画しないのではないでしょうか。「6千円の会費は地元に合わない」「濃茶席の主菓子に紅白の酒饅頭、それも2個なんて」、地元茶人からは準備段階で直言を頂戴しました。しかし、終わったときに、「いいお茶会になりましたね」とお声をかけてくれたのは、茶人の女性の方々でした。茶の湯ネットワークが支えてくれました。

茶会終了数日後、富田川のほとりに西行の上富田町におけるもう一首の歌の碑が建ちました。「西行を見直そう」「西行で観光まちづくりを」の声が、あがっています。西行を語る風はいま熊野から吹いています。

もう一つの事業「西行と行く　熊野もう一つの歩き方」マップも、まもなく出来上がります。西行歌とマップを道連れに熊野へ、歩いてみたくなる西行物語があります。お楽しみに。

きのくに活性化センターでは、平成30年度から２つの研究調査に取り組んでいます。調査状況を中間報告します。

1. 観光客向けの防災対策の現状調査

南海トラフ地震発生の確率が高まる中、和歌山県東牟婁郡域のＪＲきのくに線・国道42号沿線にある主要な観光資源（具体的には❶橋杭岩付近❷那智勝浦町・紀伊勝浦駅付近❸世界遺産高野坂・王子が浜）の近くに指定されている「避難所（避難場所）」について、観光客受け入れ態勢の現状と課題を把握することを目的に実施。調査は上記三地点における①最大の観光客数を推定②想定津波時分の把握③「想定津波時分」と「避難所（避難場所）までの距離」「避難所（避難場所）までの所要時間」を比較検討することにしています。

30年度は予備調査として①「社会教育施設における防災・避難者対応の現況調査Ｉ　―和歌山県南紀熊野地区を中心に―」→南紀熊野地域において社会教育施設が避難場所となっている数を網羅的に把握→防災拠点としての「公民館」の強みを調査②調査三地点の文献（避難所具体的には❶橋杭岩付近❷那智勝浦町・紀伊勝浦駅付近❸世界遺産高野坂・王子が浜の数と受け入れ）調査と現況調査を実施しています。

2. 若手農業経営者における労働力不足に関する実態調査

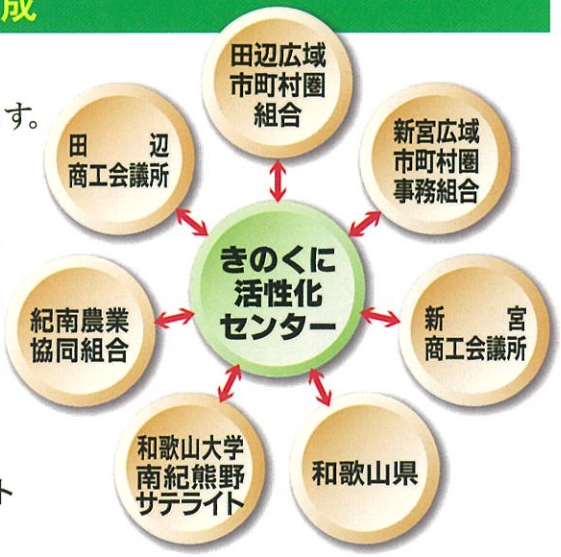
人口減少化のもと、農村地域ではこれまでのように地域内で労働力を確保することは困難になっています。事態は今後一層深刻化するとみられ、そのため、若手農業経営者は労働力の確保を強く求めており（日本農業新聞20180501）大学生も含めた地域外の労働力の活用に期待が寄せられています。このことは、和歌山県内でみても、同様の意見が聞かれます（ＪＡ和歌山県青年部リーダー研修会ヒアリング。平成30年４月27日開催）。しかし実際に、どの品目で、どの時期に、どの程度の労働力が必要なのかという実態調査は行われていないのが実情です。

そこで、今後の地域農業の担い手となる若手農業者にヒアリングを行い、本調査結果を労働力確保に向けた対策検討の基礎資料として活用することにしています。新年度の早い時期にＪＡ青年部に対してアンケート調査を実施する予定です。

きのくに活性化センターの構成

きのくに活性化センターは、
以下の団体・機関で構成されています。
（2019年4月現在）

- ●田辺周辺広域市町村圏組合
- ●新宮周辺広域市町村圏事務組合
- ●田辺商工会議所
- ●新宮商工会議所
- ●紀南農業協同組合
- ●和歌山県
- ●和歌山大学・南紀熊野サテライト



編集後記

「NEWSきのくに」は今回で25号となります。この間、紀南地域の課題やまちづくりの動きを見つめてきました。地方を取り巻く環境は確かに厳しい、しかし前を向いて新しい道を切り開く人たちの姿を紹介してきました。編集者として、女性や青年たちの行動に、地域が変わる可能性を感じてきました。地方が活力を取り戻すとき、紀南地域がよみがえる日にしなくてはなりません。きのくに活性化センターは、これからも産官学民、各分野が共同で地域の活性化を図っていく核を担いたいと考えています。「NEWS」はそのための情報誌です。新年度からは新しいスタイルの地域とセンターをつなぐメディアをめざします。　（す）